



補助魔術師 ギルド



天木日景

第一話 逃し屋と軍師

我ながらひどい臭いを付与したものと、アクセルは自分の手腕に感心していた。

彼は今、一台の棺を相方の補助魔術師とともに担ぎながら、城の地下霊安室に向かう螺旋階段を一步一步降りているところだった。

棺桶の中には、今回の案件の依頼人が収まっている。死体ではなく、生きた人間だ。補助魔術師ギルドはゾンビとは取引しない。

依頼人は、彼らが今居る城の城主の妻だ。この城は、現在籠城している。北方の強国との長きに渡る戦争が最近になって膠着状態を破り、城主側が劣勢に追い込まれたのだ。現在、城は四方から敵軍に包囲されている状態だ。

四方にある城門は全て閉じられ、出入城は誰にも叶わない。食事や水の摂取には制限がかけられ、当然ながら水浴びもできない。

籠城5日目にして、換気の悪い城内には悪臭が漂い始めた。

アクセル達の依頼人は、その状況に音を上げ、城内から伝書鳩を使ってギルドに依頼をかけたのだった。

アクセル達は、依頼人を城外に逃すために、まず依頼人を殺すことにした。

もちろん、本気で殺すわけじゃない。仮死状態にする。小麦粉を固めた丸薬に『仮死状態にする効用』を付加し、それを伝書鳩で依頼人に送る。依頼人には、一昼夜後にそれを飲むよう指示する。

その一昼夜の間を利用して、アクセルとその相棒は城への潜入を開始する。

まず、二人は自身の身体を蛇に変化させ、依頼者の敵である軍隊の横をすり抜け、城壁の上方に穿たれた射撃用の狭間窓に上り、やすやすと城内にもぐりこんだ。

次に二人は、城内の住人になり済ます必要があったので、手近にいた従者二人をすまきにして倉庫の奥深くに放り込んでおいた。そして、彼らの姿を完全に真似た変身を行った。

暫くそのまま経過すると、やにわに城内が騒がしくなってきた。おそらく依頼人が死亡、もとい、仮死したのだ。二人は現場に駆け付ける。

依頼人は自室で息絶えていた。ご丁寧に遺書まで書いて、自殺を装っている。曰く、長い籠城生活に疲れた云々。

——長いったってまだ八日目じゃないか。

アクセルはそう思ったが黙っておいた。

籠城下にあるため、贅のある弔いは出来ないと城主は言った。神父を呼んで簡易的な葬儀を済ませると、城主は遺体を地下の霊安室に収めるよう臣下に命令した。やんわりと忌避する臣下たちの中から二名が立候補した。もちろん、この時立候補したのはアクセルとその相棒だ。

アクセルは死体の収まる棺桶に死臭を付与した。少しずつ臭いがひどくなるよう調整をして。

城の住人たちが見送る中、棺桶は地下霊安室へと出発した。

そして、今に至る。

なぜこんな手間をかけて地下霊安室に依頼人を移動させようとしているかという、二つの意図がある。

一つ、逃亡に際し、依頼人には一度社会的に死んでもらった方が良いから。

一つ、地下霊安室には、城の地下道と直結した通路があるから。

地下霊安室の傍には天然の地下水道が走っており、城の下水道としての役割を果たしていた。

霊安室の主は、遺体置き場を確保するために、邪魔になった遺体を折を見てこの地下水道に流したりもしているようだ。

先ほど付与した死臭は、この霊安室の主対策だった。

螺旋階段を下り切った突き当たりに鉄格子の扉があった。その前には、霊安室の主が鉄格子の鍵を持って佇んでいた。

ランタンだけで照らされた薄暗い螺旋階段の下で、その男の姿は不気味に過ぎた。そもそも輪郭が蛙のように横長で、うすべったい両目とも互い違いの斜視。歯は不揃いのすきっ歯。なかなか異形だった。

男は棺桶を認めるや、愉快そうに身体を揺らして笑った。

「へ、へ、へ。臭えなあ」

男は棺桶を降ろすようアクセルに求めた。二人は言われたとおりにする。

「中身を改めさせてもらいますよ、と」

男が棺桶に手をかける寸前、アクセルは男の目を欺く術をかけた。

男が棺桶の蓋を横にずらすと、依頼人の顔が現れた。彼はその顔を見た瞬間、トカゲみたいな目を丸くした。

「いやー、いやいやいや、こんな状態のひどいのは初めてだ〜」

アクセルから見ると、依頼人の顔は、仮死状態のせいで青ざめているが、原型は当然とどめている。

男は見えない蠅を払うように依頼人の顔の上で手を振った。遺体をひとしきり矯めつ眇めつしたあと、男は満足したように棺桶の蓋を戻した。そして、不審な笑いを続けながらも鉄格子に向き直り、鍵を開けた。

無言で辞儀をしてアクセルと相棒は霊安室に入って行った。

アクセルとその相棒は本物の死臭を鼻に受け、思わず自らの嗅覚を鈍化する魔術をかけた。

霊安室内はアクセルが想像した以上に広かった。天井は高くはなかったが縦横の空間にゆとりがあった。

室内にはごうごうと水の流れる音が反響していた。地下水道が近くにある証左だ。

二人はまず地下水道へ続く通路が無いか探った。はたして、部屋の隅にそれは見つかった。

大人二人通れるくらいの天井の低い通路を行くと、天然の岩肌を持った洞窟にぶつかる。その洞窟を進んでいくと、眼下に黒々と流れる地下水を確認した。地下洞窟は地下水とともに下流へと続いていた。アクセルはそこまで確認すると、依頼人の許に戻った。ここからは、依頼人に歩いてもらう必要がある。

アクセルは依頼人を蘇生させる前に、口を封じる魔術をかけた。依頼人の性格から考えて、口を開かせたらとても隠密にことが運ぶとは思えなかったのだ。

依頼人の蘇生には慎重を期した。へまをすれば本当に依頼人が死ぬ。

蘇生に成功すると、依頼人はゆるゆると棺桶の中から起きあがった。起きあがるとすぐ、依頼人は自分の声が出ないことに不満を持った。アクセルとその相棒二人がかりで、どうにかこうにか依頼人を宥めすかす。

アクセルの相棒が依頼人に肩を貸し、地下道を経由して地下水路を下っていく。

しばらく進むと、視界の遠くに外の光が見えてきた。しかし、そこでアクセルは違和感を感じて後続の相棒と依頼人を押しとどめた。彼は自らの目に視力強化の魔術を付与し、再び外光の差す辺りを見やった。すると、逆光にまぎれて複数の人影が隠れているのが分かった。

――待ち伏せか...しかし誰が、なぜ。

アクセルは逡巡した。魔術を使えば容易にやり過ごすことは出来る。ただ、ここに待ち伏せが存在することそのものが問題だ。この逃亡計画は既にどこかに漏れていて、依頼人を外に出した後も追手が付くのではまずい。状況を確認する必要がある。

アクセルは意を決め、出来る限り人影に近づいた。そして彼は人影の一団に催眠の魔術をかけた。遠距離からこの魔術を使うのは失敗のリスクが高かったが、なんとか成功したようだ。

アクセルは一団に歩み寄った。一団は男が二人、風体を見るに傭兵か何かのようにも見える。アクセルは一団に語りかけた。

「お前達は何者だ？ 何故ここにいる？」

すると、男の一人が答えた。

「斥候だ。わが軍の軍師が千里眼を發揮し、城壁の一部に横穴を発見した。我々はその調査のためやってきた」

アクセルはそれを聞いて安堵した。どうやら追手ではなかった。しかし、彼は同時に嘆息した。彼はその軍師のことをよく知っていた。

(仕事出来るのは良いけど、人の仕事の邪魔はして欲しくないな)

アクセルは相棒と依頼人を呼びよせると、地下洞窟の出口に向かって歩いて行った。

地下洞窟を出る直前、アクセルは依頼人と相棒と自らを透明化する魔術をかけた。はぐれないように手をつなぎ合って、三人は地下洞窟を出た。

城を包囲する敵軍の陣地を突破し、敵の視界から外れた小高い丘の上に来たところで、アクセルは透明化の魔術を解いた。任務完了だ。

依頼人はアクセルと相棒にひとしきり礼を言い、謝礼として約束された分の硬貨と宝石の付いたピアスをアクセルの手に握らせた。

依頼人の後姿を見送りながら、アクセルの相棒が口を開いた。

「そういえば、ここを包囲してる軍にはうちの長が居るんですよね」

「ああ、軍師として雇われているらしいね」アクセルが頷く。

「じゃあ、この城、すぐに落ちちゃいますね」

「うん、だから、俺達が仕事をしたんじゃないか。真の依頼者である城主の願いを受けてね」

「私達は、どっちの味方なんですか？」

「別に俺達に敵も味方もいないよ、エンマ。依頼人がいるだけ。利害を食い合わない限り、依頼人同士が敵対していても問題はないんだ」

アクセルが言うと、エンマと呼ばれた相棒は破顔した。

「うーん、いいっすねえ、そういう渋い考え方！ いかにも補助魔術師ギルドって感じっす！」

「...？ ...よくわからないけど、お褒めに与ったなら光荣だね。さて、じゃあこっちはぼちぼち帰還しよう」

一人の軍師が戦場を眺めていた。

彼は、城の北側の丘陵から走り去る男女二人――アクセルとエンマの姿を、2エンド（約2キロメートル）先の崖の上から見て、満足そうに笑った。

「アクセルの奴、どうやら俺の出した斥候をまいたようだな。重畳重畳」

その言を聞いて、傍らに立つ男がたしなめる。

「ハンス、もし彼らが斥候に気付かなかったらどうなっていたと思いますか。悪ふざけはたいがいにしましよう」

軍師・ハンスは苦笑した。

「ヨハン、あいつがそんなへまをするはずないぜ。今回の仕事はあいつには軽すぎたからな。ちょっと刺激をくれてやったまでだ」

ヨハンと呼ばれた男は呆れたように首を振った。

「あの城を見てみる、ヨハン」

ハンスが眼下を指す。自軍二千人の兵が城の外周をぐるりと包囲している。小さな城だった。外周に一枚石造りの城壁がある他は、本城があるだけの簡素な作りだった。城門は東西南北に存在し、それぞれに自軍の兵士達が密集している。

「見てくれは砦以上城未満といったところだが、兵力はごっそり溜めこんである。依頼人の二万の軍勢は城塞都市アベリテを攻略するにあたり、挟撃を恐れて、まず先にこの城を落とすことにした。だが、全軍を以て攻略にあたっては、逆にアベリテから出撃した部隊に挟撃にされる可能性がある。そこで、城の攻略には虎の子の二千人を割いて挑むことになった。ここで俺達の出番と言うわけだな。人的資源が足りない時には補助魔術師！ 我がギルドはこれで売っていきたいもんだなあ、ヨハン。...で、だ。しかる理由でこの城を攻めるからには、一つ気を利かせてやった方が良くないか俺は考えた。依頼人としては、この城から敵兵力がわんさと湧いて出てくるのが耐えられんと言うことだが、それならただ城を落とすだけではなく、城としての機能を潰した方が良くはないか。どうだ、ヨハン？ 異論は？」

軍師は傍らの男に尋ねる。水に向けられた男は肩をすくめた。

「御意のままに」

「よし...。...向こうの方の準備も整ったようだな」

城門破り用の丸太を携えた攻城部隊が、敵城門一一鉄でできた、人の上背二つ分くらいある立派な奴だ一一に向けて今まさに進み出ている。後は軍師・ハンスの号令を待つばかりだった。

「さて、ほんじゃそろそろ、俺様劇場、始めちゃいますか！」

ハンスが手に持つ槿の杖をひと振るいすると、城を包囲する二千の兵全員の様子が変わった。外見に変化はなかったが、彼らの内面には大きな変化があった。細胞の一つ一つから怒涛のように力がみなぎってくる。未だかつて感じたことの無い力が己の中に急速に湧きあがり、いましも爆発せんとしている。それは驚くべき感覚であり、男達を熱狂させるものだった。

ハンスは自らの喉に強化魔術をかけると、叫んだ。

「城攻めを開始する！ お前達の力は今や、一個一個が一騎当千！ 数刻のうちに眼前の城を瓦礫の山にしてみせろ！」

軍師の声は雷鳴のように周囲一帯に轟き渡った。

「攻城部隊！ 城門を突破しろ！ 本城の壁を貫け！」

引き続いて発せられたその号令に呼応し、攻城部隊は城門に向け猛然と殺到した。その速度は目にもとまらず、城門の上の狭間窓から彼らを狙っていた敵の弓兵達は、一瞬撃つべき相手を見失った。

攻城部隊が四方の城門に激突する。爆発のような轟音と共に、城門は分厚い蝶番ごと吹っ飛んだ。攻城部隊の勢いは止まらない。彼らはそのまま本丸の石壁を破壊し、回廊に飛び込む。さらに、回廊の石壁も粉碎し、城内深部まで到達した。この四か所からの突撃で、都合四つの鉄門と八枚の石壁を突き崩された。

攻城部隊は突撃の衝撃でひび割れた丸太を捨て、抜刀した。この刀にも軍師はぬかりなく術を施してあった。何人切っても切れ味が変わることもないし、刃こぼれすることもないだろう。

彼らは城内に待機していた兵士達に不意の一撃を喰らわせた。城内は大混乱に陥った。

打ち破られた城門からは、待機していた残りの兵士達が雪崩を打って飛び込んで行く。津波のように押し寄せる彼らは、城内から迎え撃ってくる敵兵を一、二太刀のもとに切り伏せていく。軍師の魔法の恩恵を受けた兵士たちの剣戟に耐えられる者はほとんどいなかったし、よしんばいたとしても神速の速さで発せられる第二撃を回避することはできなかった。

力に酔った兵士たちの中には、その凶刃を城内に住まう無辜の人々に向ける者もあった。それを見透かしたように、

「非戦闘員は殺すな！」

軍師の稲妻のような命令が落ちる。

石の天井を抜けて腹の底に響く軍師の声は、敵兵を大いに萎縮させた。彼らには悪魔の声に聞こえたことだろう。

城に突入した兵達は、城主を探していた。首級を取れば一等の褒美が出る。今や誰もがその榮譽にあずかる可能性を秘めていた。

兵達の城内突入から一刻も経たぬうちに、落城は目前という段に至っていた。

八日続いた籠城もこれで終いか。城主は嘆息した。

あっけないものだった。己が十数年かけて築いてきた武勲も、これで泡と消える。たかだか一人の魔術師が敵に加勢したばかりに、己の人生も含めた全てが終わるのだ。

武の道は虚しい。死して屍拾う者なし。葬られるのは忘却の果てだ。

ただ一つ、城主にとって誇りだったのは、細君を城外に脱出させたことだった。愚妻ではあったが、彼が最も愛した女だった。

敵の軍師が率いるギルドから魔術師を呼びよせ、この脱出劇を演出したことは、彼にとって最後の小さな勝利だった。

城主は謁見の間を最期の場所を選んだ。部屋の外から、大量の金属の具足が床を蹴る音が近づいてくる。剣を抜くと、乾いた金属音が部屋の中に響き渡る。長き武人人生を共に歩んだ愛剣が寂しく光った。

さらば、愛する妻。愛する剣。愛すべき盟友たち。

城主は部屋の中ほどに進み出でた。その顔には武人としての覚悟だけが宿っていた。

城の上にはためいていた敵軍の旗が引き下ろされ、自軍の旗が掲げられた。軍師の命令通り、一刻の間に城は制圧されたのだ。

軍師は満足そうになつくと、目下に向けて再び命令を放った。

「全軍、城から退避しろ！ 敵軍の残存兵、非戦闘員は全て捕虜として連れ出せ！ 抵抗する者は殺して構わん！ 城の中に一人も残すな！」

その命令を受け、城を文字通り侵食していた兵達は、波が引くように撤退を始めた。残存兵の大部分はもはや戦意を喪失していたが、城と共に命を散らせようとする者もあり、そうした者達は容赦なく斬られていった。

非戦闘員たる女子供、文臣等は、ある者は恐慌に陥り、ある者は泣き叫び、ある者は放心などしていたが、いずれも屈強な兵士達に捕えられ、抱えられ、城から引き揚げさせられた。

城から外に出された人々は久々に見る空に目をしばたたかせた。そして地上に目を向けると、そこに不穏な代物を認めた。

城外には巨大な兵器が配備されていた。数にして四台。直径にして人間の身長の数倍はある巨石を据えた投石機だった。

「あんな巨大な石を投げ上げるのか？ 無茶だ」

捕虜の一人が不安そうに呟いた。

軍師は崖の上で不敵な笑みを浮かべた。投石機にも軍師の魔術がかけられており、巨石を投じるに十分な馬力を与えられていた。

やがて場内の退避が終了し、一兵たりとも損失のない自軍全員と、捕虜全員が城外に集った。退避完了を示す花火が上がる。

「よし、大詰めだ！ 諸君の勝利を祝福し、これより盛大な花火を上げよう！ 投擲隊、放て！」

軍師が命ずると、四隊の投擲隊は一斉に投石機から岩を放った。風を切る重い音とともに、見上げるような巨石が、紙風船でも飛ばすように軽々と飛翔していく。

岩が本城の直上に至るや、軍師は再び杖を振るった。すると、放物線を描いて飛んでいた巨石が空中で突然落下方向を変え、直下の城に向けて猛スピードで落下した。重量変化の魔術を使用したのだ。

巨石は轟音とともに本城に激突した。総石造りの城は、瓜を割るようにはじけ飛んだ。城壁を成していた石は粉々になって四方に飛び散る。重量のある投石機の岩につぶされて、僅かに残っていた城の外壁もぐずぐずと崩れていく。もうもうと砂煙が立ち上り、城外に退避している人々を包み込んだ。

しばしの時間が経ち、砂煙が落ち着いてくると、城外で成り行きを見ていた人々は息を飲んだ。城は、もはや、無かった。ただ瓦礫の山だけが残されていた。

とある軍陣の天幕の中。

ハンスの依頼人である将軍は言葉を失った。一兵の損失も無く、攻略した城の機能を金輪際停止させ、捕虜付きで戻ってきた男が目の前にいる。

見た目はただの小男だった。白銀の髪を無造作に下ろしたその見た目は、幼くさえあり、ともすれば少年と見まがうほどだった。

将軍は咳払いをすると、居住まいを正して軍師に語りかけた。

「噂には聞いておりましたが、いやいやどうして、噂以上の力量をお持ちのようすな。感服いたしました」

ハンスはにっこりと笑った。

「お褒めにあずかり光栄です、閣下。しかし、この度の戦果は、ひとえに貴軍の精鋭をお預かりしたが故。全ての功績と栄光は彼らの物です。何卒、彼らをねぎらいくださいませ」

「いやいや、ははは」

将軍の背筋に冷や水が流れ落ちた。

精鋭などでは、なかった。

将軍はハンスの資質を疑い、彼に預けたのは主力から一線劣る者たちばかりだったのだ。その上で、この戦果だった。もはや疑うべくもない。

「時に、失礼ながら、貴君はずいぶんとお若いようですが、どなたかの師事を？ 差し支えなければ、貴君のその術がどなたよりのものか、由来を教えてください」

「いえ、実は私は独学でこの術を身につけました。素性が悪くお恥ずかしい限りです」

照れくさそうにハンスは笑った。

――鬼才か。

将軍は生まれて初めて見る人種を戦慄と共に見つめた。

同時に、将軍の胸には沸き立つような野心が生まれた。

この男を囲えば、一小国の将軍などでくすぶる今の己とはまったく別の、はるか高みの己を発見できるかもしれない。

と、ハンスの背後から彼の側近・ヨハンが近寄り、彼に何がしか耳打ちした。それに対し、ハンスは満足そうにうなづいた。

「報酬の確認がとれました。少なからず色をつけていただけたようで大変感謝しております。それでは…」

「ま、待たれよ軍師殿！」

ハンスが席を立とうとするのを、将軍は慌てて引きとめた。

「貴君には非常に興味がある！　いかがかね、この後会食があるのでそれに御出席願えるか」

ハンスは至極残念そうにかぶりを振った。

「お申し出、はなはだ光栄にございますが、生憎のところ次の仕事がございますので、本日はこれにて失礼させていただきたく存じます。...我々補助魔術師ギルドは、ご依頼があればいつでもお力になりますよ、閣下。ご用命があれば、何なりとお申し付けください」

言い終えると、ハンスは席を立ち、颯爽と天幕から辞した。

第二話 女形

王都シャハサの白亜の宮殿の広い厨房の片隅に、場違いなローブを着た魔術師が三人、手持無沙汰で立っていた。彼らは三人とも、補助魔術師と呼ばれる者達だった。男が二人と女が一人。全員まだ顔に幼さが残る若者だった。皆揃いも揃って目をうつろに開き、料理人達の戦場を眺めていた。

厨房はまさに戦場のような有様だった。補助魔術師の魔術によって身体速度を高められた料理人達が、荒れ狂う嵐のように駆けまわっている。そこかしこから怒号が上がり、それに返す答えもまた怒号。見ているだけで目が回ってしまう。

「動きが遅くなってきた！ 魔術の効果が切れそうだ！ 補助魔術を！ 早く！」

怒鳴り散らすような声で助けを求める声が耳に入り、三人の一番端にいた男が慌てて厨房に飛び込んで行った。

「尻に火が付いてるねえ」

残された二人の男の方が、これまた場違いな、のんびりとした口調で呟いた。

三人は補助魔術師ギルドから派遣された者達だった。彼らは、厨房の料理人達の行動速度を上げるために遣わされた。今日王宮で執り行われている晩餐会の規模は近年まれにみるほど大きなもので、お抱えの料理人だけでは足りず、近隣の料亭から料理人を募ってもまだ足りず、その人手不足を補うための苦肉の策として、魔術の力を借りる、という策がとられたのだ。

ギルドの仕事としては良くある部類のものだが、王宮から直々の依頼で仕事内容の割に報酬が良いので、まだ新米と言っても良いような三人があてがわれたというわけだ。

女の方がぼやいた。

「正直、退屈っす。何が悲しくて、こんな、コマネズミを量産するような仕事をしなきゃいけないでしょう」

「ぼやいちゃだめだよ、エンマ。これが下っ端の仕事と言うものなんだよ」

諦念をにじませつつ、男の方がかぶりをふった。

「いつになったら下っ端の仕事を卒業できるんすかね」

「どうだろうねえ...」

下っ端同士で話し合っても答えの出ないお題目で話をしていたところに、魔術をかけ終えたもう一人の男が帰ってきた。

「いやー、参った参った。今のだけで五回は怒鳴られた」

「おつかれさん、ゴードン。そしてご愁傷様」

「料理人の奴ら目が血走ってやがるんだもん。殺されるかと思ったわ」

ゴードンと呼ばれた下っ端魔術師は額の汗をローブの袖でぬぐった。

「次、オリバーの番だからな。覚悟しとけよ。これからが佳境なんだからな」

「うへえ、脅かさないでよ」

オリバーと呼ばれた短軀の青年が身をすくめる。彼と同じくらいの上背のエンマはフォローのつもりで、

「骨は拾います、先輩」

と肩をたたいた。それから、身を乗り出して二人に問うた。

「先輩方は、他にどんな仕事やってるんすか？ 私は入ったばかりで、まだ四つしか仕事したことが無いんですけど」

「そうだなあ、僕は牛飼いのところに行って牛の乳を出やすくしたり、商人のところに行って弁舌の力を付与したりとかかな。まあ下っ端の仕事だよな」

オリバーがのんびりと答えた。そのどうしようもなく平凡な仕事内容にエンマは明らかな落胆の色を見せた。その様子を見て、ゴードンが何かを思いついたように目を光らせた。

「俺は面白い仕事したことあるな」

エンマが目を輝かせた。

「えっ、どんな仕事っすか？」

ゴードンが意地悪い笑みを浮かべた。

「ある貴族の夜の床に入ってな、男のモノを固くするってやつ」

ひっひっひと下卑た笑いをするゴードンの鼻先をエンマは思い切りつねった。

「いででで、やめろバカ、何しやがる」

「仮にも女性を前にして不埒なことを抜かしやがるからっす」

そんな二人をなだめると、オリバーはエンマに水を向けた。

「エンマはどうして補助魔術師になろうと思ったの？」

エンマは小さな胸を張った。

「ハンスさんに憧れたんです。王都じゃ知らない人はいないくらい有名な魔術師で、武勇伝は数知れず、ついたあだ名も数知れず。救国の徒とか軍神とか呼ばれてる、あんな魔術師に私もなりたいたっすよ」

それを聞いて、オリバーは嘆息した。

「なるほど、それはまた難儀な道だねえ」

確かにそれはひどく遠い道のりだった。ハンスの才能はいわば鬼才、天才と言ってよく、凡人がそこに至るまでの道は険しかろうものだった。

「でも目下の目標はアクセルさんっす。この間、アクセルさんの助手として一緒に仕事したんすけど、そりやもう見事な手際の良さでしたよ。考え方も格好いいし、憧れの先輩の一人っすね」

エンマの言葉に、ゴードンが渋面を作って唸った。

「アクセルさんか。あの人も、しかし、結構苦勞してるぜ？ 今ギルドで一番、ハンスさんから厄介な仕事を押し付けられてる人だからな。まあそれだけハンスさんから期待されているってことなんだろうけどな。この前だってまあひどい仕事だったってぼやいてたよ」

「へえ、あのアクセルさんが弱音を吐くなんて想像できないっすね。どんな仕事だったんですか？」

「ああ、あれは先月くらいだったかな。ハンスさんとアクセルさんが本部で仕事の打ち合わせをしてたんだよ」

そう言って、ゴードンは一つの物語を語り始めた。

王都シャハサ、大通りから二つほど路地を入った場所に補助魔術師ギルドの平屋がある。その一角、小卓が並んだ打ち合わせの為の場所で、黒髪の青年と銀髪の青年が対面して座っていた。

「女性の身代わりーですか」

黒髪の青年の方が明らかに当惑した声を出した。

その青年はまだ年若く、浅黒い肌の瘦身には生命力が溢れている。海のような深い色をした碧眼は射抜くような真っ直ぐさで目の前の男を見つめていた。

対する銀髪の青年の方は小柄な体格をしており、やや病的な臭いもする青白い腕をローブの中から覗かせている。片手には長柄のキセルを持ち、もう片方の手では華奢で節一つない美しい指が小卓をとんとんと叩いた。

「そうだ。その方はやんごとなき方でな、故に色々と身边に危険が及ぶこともある。今回、彼女に一通の殺害予告が届いた。水無月二十日深夜に彼女の邸宅に乗り込み彼女を殺すというような内容だったそうだ。熱狂的な彼女の支持者からの脅迫状のようだな」

支持者.....

黒髪の青年はその言葉に違和感を持ち、銀髪の男に尋ねた。

「その女性の名は？」

「希代の踊り子にして絶世の美女、アンナ。王都では知らぬものはいない。お前も知ってるよな、アクセル」

アクセルと呼ばれた黒髪の青年は息を飲んだ。

踊り子アンナ。王都どころか国中にその名が聞かれる、一流の芸子だった。彼女の踊りは多くの伝説を生んでおり、隣国との同盟の切り札に彼女の舞が使われたとも噂されている。その踊りを観る為、劇場には多くの人殺到し、場外まで列が延々伸びるのをアクセルも見たことがある。彼女の支持者は多く、庶民だけでなく貴族、王族の中にまで彼女の為に城下に足を延ばす方もおわすらしい。

その踊り子が命を狙われているとなればそれは国を揺るがす一大事と言える。

「今回の件では、先方も非常に神経質になっているようだ。彼女の為に一級の護衛を多数招き、彼女の警護にあたらせているようだが、それでも安心できぬとあって、我々にも助力を要請してきたというわけだ。お前は彼女の姿を模し、予告のあった日の夜に襲撃を待つ。何事もなければめっけもん。万が一警備の目をかいくぐって暗殺者が部屋に闖入してきたその時は、お前の傭兵時代の経験が役に立つというわけだ」

状況は銀髪の男、アクセルの上司であるところのハンスの話でおおかた飲みこめた。しかし、アクセルは気が進まなかった。

「なぜ俺なのですか？ ギルドにはルフアのような優秀な女性魔術師もいます。男の俺が女性の姿を真似ると言うのはどうも…」

「刃傷沙汰になった時にうまく立ち回れるのは、このギルドでは俺を除くとお前とギユンターくらいだ。お前なら真面目だから、依頼人の身体を真似ても変な気は起こさない。俺やギユンターに任せてみろ、どうなるか想像できるだろ？」

アクセルは唸った。自分で言うな、という言葉が喉元まで出かけた。

「それにな、アクセル…」

ハンスはいたずらっぽく目を光らせて笑った。

「女の真似をするなら、男の方が上手いもんなんだよ」

なおも食い下がろうとするハンスを手で制して、ハンスは一服キセルをふかした。

「これはギルド長としての命令だ。二十日の夜、お前はアンナの邸宅に直接出向しろ。話は以上だ」

そう言って椅子を蹴ると、ハンスは颯爽と自席に戻って行った。引き留めようとのぼされたアクセルの手が虚しく宙を舞った。

残されたアクセルは長い溜息をついた。

踊り子アンナの邸宅は、王都シャハサの上級居住区域にある。高い塀を持つ広い庭付きの建物が連なるこの周辺は、大通り近くの喧騒とはかけ離れた、至極閑静な場所だった。

馬車がすれ違えるほど広い道の端を歩きながら、アクセルは（場違いな場所に来てしまったものだ）と思っていた。道はたくさんのアルコール灯で照らされ、ランプを持ち歩く必要もなかった。時折、貴族の乗った馬車が乾いた音を立てて道の真ん中を通り過ぎていく。この場所では、道は人の足で歩くような場所ではないらしい。

アクセルは地図を頼りにアンナの邸宅にたどり着いた。三階建ての豪華な邸宅は宮殿を思わせる佇まいだった。城のように高く天を衝く漆喰の壁が篝火に照らされて闇夜に輝き浮かび上がる様は、荘厳の一言に尽きた。

邸宅の周囲には護衛と思しき武装した男がそこかしこに立っており、緊迫感がいや増している。アクセルは護衛に事情を説明し、門の中に足を踏み入れる。

全面に美しい蔓草の意匠を施された扉をノックすると、中からアクセルも初めて見る、執事という人種が現れた。彼はアクセルの来訪を祝福し、館の中に招き入れた。

館の中もまた外と同じく壮麗だった。美しい深紅の絨毯が床を覆い、壁は総大理石。部屋の中央から伸びる大階段の上には、巨大な宗教画が来客を見下ろしていた。天使が舞踊で悪魔に魅入られた人間達を救済する場面を油彩で描いたものだった。

「素晴らしい絵ですね」

アクセルは嘆息した。執事は上品に笑った。

「恐れ入ります。ご主人様が最良にしている画家に描かせたものです」

画家をかこっているとは、ますます貴族然としているじゃないか。アクセルは館の主が一介の踊り子であるということが信じられなくなってきた。

アクセルは館の三階の一室に案内された。そこはどうやら来賓用の応接間のように、ここにも嫌みの無い加減でさまざまな装飾品や美しい調度品があしらわれていた。

身の沈み込むようなソファーに腰かけ、緊張しながら待っていると、部屋の外から足音が近づいてくるのが聞こえた。

はたして、女主人はアクセルの前に姿を現した。

アクセルは立ちあがることができなかった。

――美しかったのだ。余りにも。

流れるような長い銀髪、屋敷の大理石もかくやと言うほどに白い肌、ノースリーブのドレスから伸びた腕はほっそりと華奢、卵型の小さな頭には陶器でできたような滑らかな曲線を描く頬と筋の通った鼻梁、宝石を思わせるような輝ける澄んだな碧眼、控えめに紅を差された唇、そのどれをとっても、どれをとっても完成された美しさだった。それはまるで、一流の彫刻家が大理石から作り上げた彫刻がそのまま動き出しているようだった。

彼女がいるだけで、景色が今までと全く違うものに見えた。この壮麗な館の全てが、彼女の存在を以て初めて完成するのだと、アクセルは確信した。

「その方が、私の身代わりか？」

力のある、それでいて耳触りのいい声で、女主人はアクセルに語りかけた。

アクセルが慌てて立ちあがろうとするが、驚いたことに足に力が入らない。情けない話だが、女主人の余りの美しさにアクセルは腰を抜かしていた。慌てて肉体稼働の魔術を使おうとして手を掲げるのを、女主人が制した。

「よい。初めて我を近くで見る者はおおむね同じ反応をする」

女主人は顔色一つ変えずに部屋に進みいると、テーブルを挟んでアクセルと向かい合わせに座った。足を少し崩して坐した姿もまた、優美そのものだった。

「無礼の段、平にご容赦ください。私は補助魔術師ギルドより参りました、アクセルと申します。貴下にご拝謁賜り...」

「堅苦しい挨拶は無用。言い慣れていない様が見え透いて気分が悪い」

女主人は手を振ってアクセルの言を制した。

「我はアンナ。この館の主人だ。踊り子のアンナと言えば通りは良いな」

執事が紅茶を運んでくる。馥郁たる香りが部屋に満ちた。何という茶葉なのだろう、きっと高価なものだろう、などと思いながら差し出されるままにアクセルはティーカップを目で追っていた。

執事が去ると、アクセルは話を切り出した。

「この度は大変な災難に見舞われたようで、心中お察しします」

「皆、大げさに騒ぎ過ぎだ。悪漢の襲撃など、この身分になる前——平民酒場で日銭を稼いでいた頃には日常的なものだった。...まあ、その頃から比べると立場が違うがな」

アンナは目を伏せて溜息をついた。そして、やにわに目を開き、厳然たる視線でアクセルを射抜いた。

「さて、早速本題に入ろう。正直に申そう。その方のような魔術師が来て我は少なからず失望しておる」

アクセルは己の身体から血の気が失せていくのを感じた。何の不手際があったか。アクセルの頭脳が必死の回転で自分の落ち度を探した。

「我の身代わりを務めるのであるからして、我としては女の魔術師が来るものと思っておった。ところが蓋を開けてみればどうだ。無骨な男が一人、こうしてのこのこやってきているではないか」

返す言葉も無かった。しかしここで弁明しなければ仕事の失注も有り得る。

アクセルは額に汗しながら説明した。

「仰ること、重々理解しております。しかし、万一襲撃があった際に、男の力があつた方が都合が良いのです。何卒ご容赦を...」

しかし、女主人の心は頑なだった。

「我には、男が我の姿をやつすなど耐えがたい。その方が我が身を模した姿で何をするかも知れぬではないか」

アクセルはその言葉に、毅然とした態度で返した。

「私はそのような真似は決していたしません。...証明する術はございませんが、信仰する魔術の神に誓いましょう」

「...ふむ...」

アンナは目を閉じて何事か考え始めた。しばらくの沈黙が流れた後、アンナは黙考から戻り、目を開いた。

「一つ面白い考えを思いついた。聞いてくれるか？」

アクセルはうなづいた。女主人は咳払いすると、なにやら少し照れくさそうに身をよじりながら一つの案を開陳した。

「私の姿をその方に貸している間、我がその方の姿を借りる、というのはどうだろう。現身の姿を取りかえるのだ。その方はそれで職務を全うできるし、我はしがらみから解き放たれ自由を得る。如何か？ 悪い条件ではなかろう？」

アクセルは一瞬ひるんだ。それこそ、アンナがアクセルの姿を使って何をするか分かったものではなかった。しかし、とっさには代替条件を思いつかず、やむなくアクセルはその申し出を了承した。

アンナの顔に少女のような笑顔が浮かんだ。

「了承してくれるか！ うむ、話の分かる男でよかった！ では、早速姿の交換をしようではないか」

やおらアンナは立ち上がると、アクセルの手を取り魔術を促す。きめの細かな手のひらの感触に胸を自然と高鳴らせながら、アクセルはよろよろと立ちあがった。このような美しい女性に手を握られたことが、アクセルには素直に嬉しかった。

アクセルは、まず自らに姿替えの魔術をかけた。次いで、自らの喉に声替えの魔術をかける。アクセルの身体が白い光に包まれ、己の身体構造が少しずつ変化していくのをアクセルは感じた。

「いかがでしょうか？」

変身が終わると、アクセルはアンナに声をかけた。その声は、アンナのものと同じ、力強く張りのある、透明感のある高音だった。

アンナは目を丸くしてアクセルの姿を見た。

「驚いたな。鏡を見ているようだ。声まで似せることができるとはな」

アンナの言うとおりの、部屋には二つの同じ姿が鏡合わせのように対峙していた。双子でもここまで似ることはないだろう。それも当然、二人は全く同じ人物なのだから。

続いて、アクセルはアンナに姿替えと声替えの魔術をかけた。

アクセルの目の前には黒い髪に黒い肌を持つ痩身の男が現れた。男は茶褐色の毛皮で出来たローブを身にまとい、アクセルを見下ろしていた。紛れもない、魔術師アクセルの姿だった。

「ほう、上背が高くなると少しばかり世界が変わって見えるな...っと、声もその方に合わせていたのだったな」

アンナはアクセルの声で言った。低く良く通る、男性らしい声だった。

「これが男の身体か...ふむ...全身の力の入り方が違うな」

アンナは暫くの間腕を曲げて上腕筋のつきを調べたりしていたが、突然「よし」と呟くと、

「これから我は街に繰り出す。その方はその姿で我の姿を立派に務めあげて見せよ」

と言い残し、部屋を去ろうとした。慌てたアクセルがそれを制止する。

「お、お待ちください！ その姿で外出されるのですか？」

「その通りだ。何か問題が？」

問題だった。たとえ依頼人といえど、自分の姿を借りて勝手なことをされては堪ったものではない。

アクセルは失礼にならぬよう言葉に気をつけながら、アンナの行動を思いとどまらせる為の説得を始めた。

「外は危険にございます。アンナ様にもしものことがあっては」

「この姿をしていれば私をアンナと認識する者はおるまい。その方は普段生活している間に頻繁に身の危険を感じたことはあるか？ そうなкаろう」

「しかし、そのお姿でもお身体に疵がつけば、それはそのままアンナ様の疵になりましょう。そのような危険は避けられた方が...」

「我はこう見えて昔は大衆を相手に仕事をする踊り子だった。時に生傷なども作ったりしたものだ。問題ない」

「その喋り方もまずいです。正体がばれてしまっては元も子も有りません」

「演技をすれば良いのだろうか？ 我の十八番ではないか」

この女傑は全く、ああ言えばこう言う。アクセルは早くも参ってしまった。

「他に言いたいことはあるか？」

アンナは楽しげに笑って言った。

「...正直に申しますと、その身体であまり出歩いていただきたくありません...」

「却下だ！ そなたが我の姿を模すからには、それなりの対価が必要というもの。これがその対価だ。思い知ったかな、ふふふ」

アンナ扮するアクセルは身を翻すと、肩越しにアクセルに語りかけた。

「今日は帰らぬ！ 執事にもそう伝えておいてくれ！」

彼女は言い残すと、アクセルが止める間もなく颯爽と部屋を出て行った。

部屋に残されたアクセルは、所在無げに頭を掻いた。

アンナは興奮していた。こんな機会はまたとないだろう。あの魔術師には感謝しなければならない。感謝してもしきれない。

外に出られる。娑婆の空気を浴びられる。今夜限りは、好き放題に生きられるのだ。

アンナはここ数年、自分の意思で外出することも儘ならぬ状況に置かれていた。隣国との同盟の際に余興として舞った頃から彼女は国から重用されるようになった。それと共に、彼女を取り巻く環境も変わり始めた。彼女は地位を得るとともに、いつのまにか自由を失っていたのだ。昔のように大衆酒場で舞を踊ることも出来なければ、酔いに任せて路地裏で寝ることも出来なくなった。

アンナの脳裏に、過去のバカ騒ぎの記憶が戻ってくる。希代の踊り子などと持て囃される前の、女一匹でやっていた頃の記憶が。

今日だけは、今夜だけは、男一匹アクセルとして振る舞ってみようじゃないか。

アンナは喜び勇んで夜の街に駆けだしていった。

彼女はとりあえず大通りに足を運んだ。

大通りは、始まったばかりの夜を謳歌する人々で賑わっていた。

酒場に入ろうか迷っている者、屋台の焼き物を指をくわえて見ている者、芸人魔術師が織りなす光の魔術を歓声を上げて見守る子供たち。さまざまな人種がこの大通りには溢れかえっていた。

すれ違う人が自分を顧みることが無い。それだけでアンナはいたく感動した。既に、ずっとこの姿のままでいたいと言う観念すら湧きあがってきていた。踊り子としての自分の姿は、あまりに目立ちすぎ、歩いているだけで無遠慮に人が自分に視線を投ずる。それはひどく不愉快なことだった。翻って、アクセルの姿は非常に凡庸で、どこにでもいる南方人の姿だった。誰一人として、彼の姿に興味を持つ者は無かった。そのことが、アンナを狂おしいほど喜ばせた。

アンナは街角で博打を打つ男達の輪の中に入った。男達がやっていたのはかるたの一種で、アンナもルールを知っているカードを使ったゲームだった。外野の一人がアンナの姿に気づくと、朗らかに声をかけた。

「兄ちゃんもやるかい？ 一回賭け金は十セクトからだ」

アンナは首肯して場となる台の傍らに座った。彼女はいきなり百セクト硬貨を三枚場に置いた。場が、おお、とどよめく。親は表情を隠してカードを配った。

アンナは手札を観た。存外良い手だ。彼女は掛け金を六百セクトに引き上げた。山から札を引くと、手札を親に見せた。

「上がりだ。千二百セクト頂くぞ」

野次馬達がおお、と歓声を上げる。

アンナの全身に、血が逆流するような興奮が駆け巡った。

素晴らしい体験だ。この一刻一刻が、千金に値する。アンナは目を輝かせて賭博に没頭した。勝っても、負けても、楽しかった。

かつて、彼女は同じように賭けごとに興じていた時期があった。恐れを知らない若き日々だ。

その頃の記憶が、いやおうにも蘇ってくるのだ。

結局のところ、アンナはずいぶんと負けた。ずいぶんどころではなく、手持ちの金のほとんどをすってしまった。しかし、彼女は満足だった。どれだけ高い金を支払って、家具調度を贖っても得ることができなかった快感を手にすることができたのだから。

しかし、当座の雨露をしのぐ金すら失ってしまったので、正直なところ思案に暮れていた。

彼女は仕方なしに、若き日を思い出して近場の酒場にもぐりこんだ。

酒場は既に『出来上がった』男女たちでごった返していた。ありとあらゆる罵声嬌声のごたまんとした坩堝だった。アンナは胸をときめかせながら彼らの間をすり抜け、ひとまずカウンターに腰かけた。

「兄さん、何にする？」

酒場の主人がアンナの顔を見て問う。アンナは懐から最後のコインを一枚出し、

「これで飲めるものと食べられるもの」

と注文した。

ほどなくしてやってきた小グラスのビールと揚げ豆をあおっていると、酒場の中央辺りで吟遊詩人が椅子を蹴って立ちあがった。

「それでは一、ここで一曲う、歌わせていただこうとお、思いますっ！」

場に割れんばかりの拍手が満ちる。

吟遊詩人が歌い始めたのは、陽気な異国の舞踊曲だった。

たまらず、アンナは吟遊詩人の前に身を躍らせた。

「それならば踊りも一つ！ 気に入ったら酒をおごってくれよ！」

ニーチャン踊れんのかー！ という罵声をよそに、アンナは得意の舞を披露し始めた。曲に合わせて細かにステップを踏み、ローブの端をスカート替わりにひらつかせる様を見て、酒場の人々は歓声を上げた。

「ニーチャン、踊り子のアンナもかくやだぜ！」

酔客が声援を送る。アンナは思わず噴き出した。それもそのはず、踊り子のアンナ本人だった

。

そのうち、酒場にいた連中皆が踊りに加わり、互いに酒を浴びせまくる。

アンナは笑った。踊りながら、酒をぶっかけられながら、大声で腹の底から笑った。

最高の夜だった。ずっと続いてほしいと思えるような。

その酒場の狂乱は明けが来るまで続いた。アンナの踊りも、いつまでも続いていた。

アンナの寝室で、アクセルは落ち着かず過ごしていた。

ちょっとした広間ほどもある寢室の中央、贅を尽くされた装飾を誇る寢台の上にアクセルは腰かけていた。天蓋のある豪華な寢台は、座るとふんわりと身体が沈み込む。所在が無くそこに座るだけで、アクセルは他にすることも無く無聊をかこっていた。

そんな折、寢室の扉をせわしなくノックする音がした。

「どうぞ」

アクセルは落ち着いた声で促した。

部屋に入ってきたのは、初老の執事だった。彼は落ち着かない様子で手をもみしだき、眉を八字にしてアクセルの前に進み出てきた。

彼は言った。

「お休みのところ失礼いたします、アクセル様。大変恐縮ではありますが、一つお願いがあって参りました」

こわばった顔つきで執事。身を縮ませるようにして恐縮する様子は妙に哀れっぽかった。

アクセルはうなづき、寢台の傍のスツールを勧めた。執事は静かに腰かける。

執事が語るところによると、どうやら劇場で今日主演を務める筈だった踊り子が突然体調不良で倒れてしまい、代役が必要になったということだった。代役を務められる踊り子は現在アンナしかいないと言うことで、急きよ依頼が舞い込んで来たのだ。

アクセルは丁重に断った。自分には踊りは出来ない、アンナの名に泥を塗るだけだろうと。しかし、執事は食い下がった。

「踊れなくとも構いません。ステージに立ってお客様に御顔をを見せてあげるだけでも喜びます。どうか後生ですからうんと言っただけませぬか」

そこまで言われて無碍に断れるほどアクセルは酷薄ではなかった。殺害予告の時間にはまだ間がある。それまでに部屋に戻っていれば問題はない。

やむなくうんという、執事は飛び上るほど喜んだ。

劇場は黒山の人だかりになっていた。代役にアンナが来ると聞いた人々が入場券を買いに押し寄せているのだ。

殺気立った人々を馬車の中から覗き見てアクセルの顔から血の気が引いて行った。人々の熱狂が想像以上で、その中に間違っ飛り込もうものならバラバラに引き裂かれかねない勢いだった。

御者が劇場の裏手に馬車を寄せる。アクセルが馬車の窓から外を伺うと、劇場の裏口も人の山だった。芸人の出入りを待っている人々だろう。警護の人間がその人だかりを分けるように並び、なんとか人一人が歩ける道が出来た。

アクセルは馬車を飛び出すと、一目散に裏口に向けて走った。アクセルの模するアンナの肌に触れようとする手を軽やかなステップでかわすと、人々の間から大きな歓声上がる。アンナの身体は、筋肉は踊りを覚えているのだろうか。アクセルは劇場の裏口の扉にたどり着くと、人々に一礼をして扉をくぐった。再び聞こえてくる波のような歓声を背中に受けながら。

劇場に入ると、案内の者に促されるままに控室に入る。そこに待機していた衣装係の者と化粧係の者がアクセルに服を脱ぐよう促す。衣装係の用意した衣装は肌の露出も多く、着替える時には半裸にならねばならないのだ。

アクセルは慌てた。

「ご存じか知りませんが、私は今アンナ様の姿を模した別人です。アンナ様の裸体を見るわけにはまいりません」

アクセルは生真面目な男だった。

衣装係と化粧係は仕方なく、下着のままで着ることのできるドレスをアクセルにあてがい、化粧も薄化粧にとどめることにした。

舞台裏に出ると観客達のざわめき声が肌を震わせるほど響いていた。アクセルは自らに鎮静の魔術をかける。

舞台に出て、何をやるか。アクセルは一つ考えがあった。さすがにただ出て行って何もせずに舞台袖に引き下がるわけにはいかないと考えていた。

舞台袖で心配そうにアクセルを見つめてくる執事に目礼すると、アクセルは舞台に進み出た。

割れんばかりの拍手がアクセルを包み込んだ。これ以上ないと言うくらい大音響の拍手。目をキラキラと輝かせた観客達の眼差しは、ただアンナの姿を見ることだけで幸福を感じているようだった。

アクセルは拍手が鎮まるのを待ってから、口を開いた。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。急病を患った踊り子サンドラに代わり、本日は私がこの舞台に立たせていただくことになりました。何卒ご容赦いただきたく」

客席から再び拍手が沸き起こる。「サンドラの代わりがアンナなんて、俺は幸運だぞー」そんな声援も聞こえてくる。同時に、「今日のアンナはやけに殊勝じゃないか」という声も聞こえてきた。多分、いつものアンナはあの通り、高慢ちきなふるまいをしているのだろう。

ならば、今日のアンナはいつもより女性らしく振る舞おうじゃないか、とアクセルは腹に決めていた。

アクセルは申し訳なさそうに眉を寄せた。

「皆さん、残念ながら、私も本日は足をくじいてしまいまして、踊りを踊ることはできません。代わりと言ってはなんですが、本日は私の歌を披露差し上げたいと思います」

観客はどよめいた。踊り子のアンナが歌を歌う。そんな機会は今まで一度たりとも無かった。何が起きようとしているのか分からない様子の観客のどよめきは収まらなかった。

アクセルは息を大きく吸い込むと、最初の一音を発した。観客のどよめきを切り裂くように発せられた声は、強く、張りのある美しい声だった。

アクセルは、自らの故郷である南方の民謡を歌い始めた。物悲しい異国の旋律が劇場に満ちると、観客達はたちまちその音色に酔いしれた。

アクセルは歌に情感を込める為に故郷を思い出して歌っていた。冬の故郷の鈍色の空の色を。冷たい風の匂いを。黒い海のざわめきを。それらはきっと歌を通して観客に伝わっていくだろう。

アクセルはアンナの声に酔っていた。この女性の声が美しいことは、会って話した時から分かっていた。だから、彼はこの芸当を選んだ。彼女の声で歌ってみたかったのだ。故郷の歌を。

彼女の歌を最も近くで聞いていたのは、アクセル自身だった。

観客達はしずかにアクセルの歌を聴いていた。中には涙を流す者もいた。アクセルは自らの芸が成功したことを確信した。

アクセルの歌が終わると、しばらく劇場はしんとした静寂に包まれていた。それから、まばらな拍手から始まり、それは大きな波のような盛大な拍手に変わった。

すぐに、アンコールの声が聞こえてくる。アクセルは、次は陽気な歌を歌うことにした。故郷の夏を思い出しながら、収穫祭の歌を歌った。観客の顔は明るく輝き、皆一様に幸福そうな表情でアンナの声に聞き入っていた。

結局、その夜アクセルは四曲を歌って舞台袖に引き上げた。その背中には熱烈な拍手が送られていた。舞台は成功裏に幕を閉じたと言ってよいだろう。アクセルは思わず舞台袖に立っていた執事と握手していた。

へとへとに疲れて屋敷に帰ると、部屋で待っていたのは暗殺者だった。彼は寝室のベッドの上に腰かけてアクセルの帰りを待っていたのだ。

「あ、そう言えば…」

すっかり忘れていたという体でアクセルが暗殺者を指差すと、彼は怒りに顔を引きつらせながら立ちあがった。

身体にぴったりと張り付くような黒い装束を身にまとった短躯の男だった。彼は右手に黒光りする黒曜石のナイフを持ち、アクセルに向き合っていた。

「どうやって侵入したのだ？」

アクセルが驚いて問う。邸宅の警備は厳重だった筈だ。

「委細聞かれるな。お命頂戴する。御覚悟を！」

男はナイフを胸元に挙げて突き進んで来た。すんでのところまで踊るように身をかかわすと、かわしざまにアクセルは暗殺者に発光の魔術をかけた。

これは同業者識別のための手順だった。傭兵時代から身につけているノウハウで、もし同業者なら間違いなく魔術反射の魔術を自らにかけているものなのだ。そこに発光の魔術をかければ、相手が同業者なら魔術を反射してアクセル自身が発光する。同業者でなければ、相手が発光する。こうして相手を識別するのだ。

はたして、今回の相手は同業者ではなかった。暗殺者は自らの身体が光り始めるのを見て明らかにうろたえた様子を見せた。その隙をアクセルが見逃す筈もなく、彼は即座に暗殺者に捕縛の魔術をかけた。暗殺者は一瞬抵抗を試みたようだが、すぐに彼は動かなくなった。

不埒者を警護の者に引き渡し、アクセルの今回の仕事は終了した。あとはアンナの帰りを待つばかりだったが、いくら待っても彼女は帰ってこなかった。『今日は帰らぬ』などとのたまっていたのだから、本当に今日は帰ってこないかもしれない。

アクセルは仕方なく、天蓋の着いた寝台の上に横になった。柔らかなクッションに包まれるのは天上にいるような心地よさだった。ほどなく彼は深い睡眠に落ちて行った。

アンナが戻ってきたのは次の日の昼も過ぎた頃だった。帰ってきたアンナの姿を見て、アクセルは顔をしかめた。それはまあひどい有様だった。どこで寝てきたのか身体じゅう泥だらけ、髪は何をかぶったのか、べたべたと棒状に固まっている。だが、なぜか表情はやけに晴れやかで、機嫌もすこぶる良いようだった。

「ひどい有様ですね」

アクセルは率直な感想を述べた。アンナはいたずらっ子のような笑顔を浮かべて、アクセルを上目遣いで見やった。

「ちとやりすぎたかもしれんな。だが、久々に生を謳歌できた。大いに満足だ」

アクセルの胸がざわついた。やりすぎたとはいったい何をか。だが、恐ろしくて聞く勇氣は持てなかった。

アクセルはまず自らの変身と変声を解除する魔術をかけた。それから、アンナの魔術を解除した。目の前には、泥だらけで酒臭いアンナの姿が現れた。

アンナは嘆息した。

「ああ、これでまた苦き日々に戻るのか。うたかたの夢とはいえ…」

アクセルがいとまを告げようとする、その背中にアンナが声をかけた。

「アクセルと言ったな。その方にはいずれまた世話になるかも知れぬ。衆生の者に憩いを与える者にもまた、憩いの時は必要なればな」

できれば二度とごめんこうむりたいと思いながら、アクセルは女主人に一礼をして部屋を辞した。

後日、アクセルのもとに酒場から大量の身に覚えの無い請求書が送付され、泡を吹かせることとなった。

第三話 同業者

王都シャハサ、補助魔術師ギルド本部にて。

ある日のこと、ギルド長であるハンスの執務室に三人の魔術師が呼び出された。一人は黒髪の青年アクセル。ハンスから重用されている有望な若手の一人だ。残りの二人は、それぞれ年若い男女だった。

男の方は、短く刈り上げた金髪に赤く焼けた肌を持ち、がっしりとした体躯を持つ巨漢だった。鳶色の瞳はぎょろりとした金壺眼で、深く落ち窪んだ眼窩の奥から鋭い光を発している。豊富に筋肉のついた二の腕が袖なしのローブから伸びており、その腕にはところどころに刀傷の跡が刻まれている。魔術師というよりは戦士と言った方がよさそうな風采だった。

もう一方は、伶俐に釣り上がった翡翠色の双眸を持つ美しい女性だ。真っ直ぐな黒髪は腰に届く程長く、その黒髪から覗く肌は白磁のように白い。鼻筋の通った鼻梁と真っ直ぐに引き締まった口元からは、この女性が持つ凛とした強さが見て取れる。

三人の魔術師は横一列に並び、机を挟んだ向こうで椅子に腰かける銀髪の天才魔術師に相對していた。

ハンスは左手に持ったキセルをひと吸いすると、おもむろに今回の仕事の内容を語り始めた。「今回の仕事はちと厄介だ。刃傷沙汰になる可能性がてきめん高い。まずはその旨、心してくれ」

巨漢の魔術師がひゅうと口笛を吹いた。ハンスの今の前置きを聞いて俄然目を輝かせるあたりに、この男の好戦性がうかがえる。

「事の発端はつい昨日のことなのだが、シャハサの上級居住区のとある貴族邸宅で一件の殺人事件が起きた。殺されたのは貴族にして騎士の称号も持つサー・デーゲンハルト。王国議会にも属する彼はハト派と言われていて、最近はクオリア魔術の軍事運用化に強硬に反対していた人物だ」

「クオリア魔術？」

巨漢の男が素っ頓狂な声で訊くと、美貌の女魔術師が鼻を鳴らした。

「ギンター、あんた、魔術師のくせにずいぶんと寡聞なことね」

ギンターと呼ばれた巨漢の魔術師は赤い顔をさらに赤くして怒った。

「うるせえよ。何なんだよそのクオリア魔術ってのはよ」

答えたのはアクセルだった。

「錬金術師クオリアが発見した新しい魔術体系だよ。魔力の無い一般人でも魔術を使えるようになるということで最近とても注目されている。その利便性の高さの一方で、かなり深刻な副作用もあるってことで実用化が足踏み状態だったって話だね」

「へっ、そいつが実用化されたら俺たちやお払い箱ってわけかい」

「そんなこともないでしょ。クオリア魔術の効果っていうのは結構限定的って話だから、私たちみたいな魔術師はこれからも必要になるわよ」

「話を戻すぞ。サー・デーゲンハルトはおそらく議会のタカ派の連中が雇った暗殺者に消されたと思われる。今回お前達が行う仕事は、その暗殺者を追い、捕まえてくること。生死問わず」

「何故私達が？」

女魔術師が柳眉を寄せる。

「どうやらその暗殺者、俺達と同業者のようなのだ。補助魔術を操る魔術剣士ラルス。殺した人間の数は両手両足の指を使っても数え切れんという物騒なヤロウだ」

「なんでそんなヤツ野放しにしとくかねえ」

ギュンターが呆れたように口元を歪めた。

「我々としては面子を保つためにも、本腰を入れてそいつを追わんといかんというわけだ。理解できたか、諸君？」

「相当な手練れということは理解できましたが、それでは私達だけでは少々心もとないですね」

「心配するな、ルフア。今回の件は傭兵ギルドとも協働態勢を取る。向こうから一名、優秀な戦士を用意してくれるそうだ。名はミッター。明日朝一番に北の城門で落ち合う手筈になっている」

「その暗殺者の居場所は分かっているんですか？」

アクセルが問う。銀髪の魔術師は首肯した。

「王都を出て街道を北に逃げたということだ。おそらく山を超えて星の海から島嶼国家群のいずれかに潜り込む腹積もりだろうな。一足先に王国軍から精鋭の追手が出たようだ。が、できればそいつらに先んじて暗殺者の首を取っておきたいところではある」

「ところでよ、今回の人選の根拠はなんなんだよ。俺とアクセルは分かるけどよ、ルフアまで必要か？」

ギュンターが仏頂面で尋ねる。上司に向かって敬語を使わないのは彼の性癖だ。

「ギュンターとアクセルは戦闘経験がある故の人選だ。ルフアは我がギルドで唯一の治癒魔術の使い手であるし、今後積極的にこういった案件に組み込んでいきたいと思っている」

「だからってこの案件はヤバいんじゃないか？ どうしろうが混ざってると足手まといになりかねえよ」

女魔術師ルフアはギュンターの顔を冷たく睨め据えた。

「あんた、私をなめてない？ 後で吠え面かく様が目に浮かぶわ」

ルフアの形の良い唇から放たれる毒舌に、ギュンターはあからさまに顔をしかめた。

「つか、正直言うと俺この女ダメ。ぜってえ合わない。人選間違ってるってハンスよお」

それに対してハンスは涼しい顔。

「仲良くしろ。俺からは以上だ。他に質問はあるか？ 無ければ解散。明日の出発に向けて準備を怠るな。――あと、俺はこれから南方の戦に参加の為、幾日か席を空ける。報告はヨハンかミケにするように」

そう言ってハンスは立ちあがり、壁にかかっていたローブを羽織ると執務室から出て行った。残された三人の魔術師達は揃って大きなため息をついた。

それぞれの思惑はこうだった。

(なんでルフアなんかと一緒に仕事しなきゃならねーんだよ、くそっ！)

(戦いは嫌いなよね……。ギユンターも一緒とかもう最悪じゃない)

(俺、この二人の仲裁役やるの嫌だな……)

三者三様だが、共通しているのは、主な悩みが人間関係に集中していることだった。一般的に、仕事の悩みの大部分は人間関係と言われるが、ここまで顕著だと問題があると言える。

三人はもう一度大きく嘆息してから、とぼとぼと執務室を出て行った。

翌朝、暗殺者追跡の任を受けた三人の魔術師は、王都北の門に集っていた。

各々は旅支度を整え、おそらく数日ばかりになるだろう道のりに備えている。戦闘が予想されるとあって、ルフアとアクセルはなめし皮でこしらえられた胸当てを身につけており、さながら傭兵のような格好だった。ギユンターが胸当てを身に着けていない理由は、

「そんなモン、剣で刺されりゃ有っても無くても変わりやしねーよ」

ということだった。

三人が微妙に気まずい沈黙に耐えながら待っていると、はたして待ち人は現れた。

「やあ、待たせてしまったようだね。すまない」

にこやかに歩み寄ってきたのは、小さな頭蓋に不釣り合いな逞しい体躯を持つ眉目秀麗な男だった。さらさらと風に揺れる栗色の髪と微笑みをたたえた薄い唇はいかにも女性受けしそうな様子。切れ長の目は琥珀色をしていて、陽の光が差すと僅かに金色に光る。その容貌からは気品すら感じられる。しかし、翻って首から下に目を向けると、贅肉一つない剥き出しの筋肉の上に分厚い鋼鉄の鎧が被せてあるという武骨さだった。そして何より目を引くのが、男の手に握られた、身の丈を超える鋼鉄の棒だった。それはまさに何の変哲もないただの棒だったのだが、先端や側部に無数についた傷跡に隠しようの無い剣呑さが漂っている。

男の顔を見たギユンターは目を剥いた。

「おい、すげえ優男が来やがったぞ」

「コラ！」

ルフアが肘でギンターのみぞおちを叩いた。悶絶するギンター。

アクセルはというと、少なからず驚いた様子で目の前の青年を見ていた。

「ミッターと聞いて、もしやと思ったけど、まさか本当に『不殺のミッター』だったとはね。こんな形で同道できるとは。光栄だよ」

言われたミッターも、目を丸くしてアクセルを指差した。

「えっ！？ 君は『黒の死神』アクセルじゃないか！ 傭兵を辞めたと聞いていたけど、今は補助魔術師ギルドに居るのか！」

「黒の死神！？ かけー！！」

「きゃあ！ アクセル、かっこいい！！」

同僚二人の冷やかしの声に、アクセルの浅黒い肌が一気に赤黒くなった。

「そ、その呼び名は止めてくれないか、ミッター。今になってまたその呼ばれ方をするのは耐え難い」

ミッターは軽快に笑った。

「名誉な通り名だと思うけどな。……アクセルはね、傭兵時代はローブも衣服も黒づくめで、黒檀の杖を振りかざして戦っていたんだ。それに黒髪と黒い肌が相まって、付いた二つ名が『黒の死神』。彼が配属された隊は死体の山を累々と築いたと言われて恐れられていたんだよ」

「若気の至りだよ、ミッター……」

アクセルは頭を掻きながらミッターと同僚達の間に入った。

「紹介する。金髪の男の方はギンター。女の方はルフア。二人とも優秀な補助魔術師だ。ルフアの方は治癒魔術も使えるから頼りにして欲しい。……ギンター、ルフア、この人がミッター。見ての通り棒術の使い手だよ。『不殺のミッター』っていう通り名の通り、戦場では一人として人を殺さずに戦闘不能に陥れる戦い方をしている。ちなみに、彼の味方した軍勢は必ず勝つという伝説があるんだ。――今もあのジンクスは健在なのか？」

ミッターは恥ずかしそうに頬を掻いた。

「幸運なことにね。お陰で食うに困ってはいないよ」

ギンターが進み出てきてミッターに手を差し伸べる。

「俺はギンター。話を聞く限りずいぶんと頼りになりそうじゃねーか、優男。よろしく頼むぜ」

ミッターはよろしくと微笑んでギンターの大きな手を握った。

「私はルフア。不殺とは良い心がけね。頼りにしてるわ」

ルフアは華奢な手をミッターに掲げる。ミッターは恭しくその手を取った。

「二人とも、今回は後ろを頼む。ラルスと直接やりあうのはおそらく僕の仕事になるだろう。腕には自信があるから期待してくれ」

ミッターは爽やかに笑うと、手に持った鋼鉄の棒で地面をひと突きした。

アクセルが手をパンパンと叩いて一同を見回す。

「よし、紹介も終わったし、ぼちぼち出発しよう。ミッター、俺たちは駅馬車は使わない。加速の魔術を使って徒歩で街道を下って暗殺者を追う。その方が速いからね」

アクセルはミッターの両足に手をかざし、加速の魔術を施した。魔術師達は各々に自分の足に魔術を施す。

「ほんじゃ行くか！」

ギョンターのかけ声を合図に、四人は城門の外に歩き出した。ミッターは、自分の身体が思いのほか軽快に動くことに驚いた。無理なく歩いているつもりだったが、いつの間にか、遠くを駆けていた筈の馬車を追いぬいていた。

凄まじい勢いで街道を下っていく四つの姿が、土ぼこりを上げて地平線の先にすっ飛んでいくのを、通行人が呆気にとられて見守っていた。

(つづく)

補助魔術師ギルド

<http://p.booklog.jp/book/53066>

著者：天木日景

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jonasan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53066>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53066>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ